



§ EMS—BMS

元・N社技術部長F氏がこう言われた。「日本の自転車産業は完全に“商業形”になったねえ」と。つまり、「日本ではもう自らの手で、自転車は造らなくてもよい時代になった」と嘆かれたものだろう。が、筆者は、なお、日本の自転車生産に賭けている。嗤われるかもしれないが…。そして、その逆転の術(て)としてEMS論を擬したBMS論をもって日本の自転車造りを再編したら如何、と提起する。

“EMS”とは、“Electronics Manufacturing Service”の訳。もともとは、電子・電気機器の製造請負企業の新しい経営システムで、開発から生産の“**自前主義**”に必ずしもこだわらない、自社のブランド名は必ずしも持たない…、しかして、多くの企業の製造を請け負う、…、そんな、**受託生産企業**が台頭してきた。このアメリカ生まれの新しい波が、日本にも、そして一般のモノ造りにも打ち寄せてきた、ということ。従来の“**下請け**”から“**自立**”への脱皮といえる。すなわち、従来からの、「下請け企業は、だいたい、親企業より技術レベルは低い」という観念は完全に破られた。「モノ造りのエキスパート」、それが、**EMS企業**といえる。

そして、大手EMS会社は、**製造、組立てにとどまらず、設計、資材調達、流通**なども手掛けているという。まさに「**IT時代の落し子**」と言える。

そのメリットとして、次のようなことが挙げられている。

製造ノウハウの蓄積

部品などの調達能力のアップ

営業能率の向上 など。

それらが画期的に期待でき、アメリカで急成長を遂げている“**ビジネス**”産業と言われる。

この風潮にのっていかざるを得ない時代となった。まさに、『**老いては子(IT時代の落し子)に従え**』だ。で、冒頭の、「**BMS手法で日本の自転車造りを**」に移るが、よく、**BMSシステム EMSシステム** たり得るかが論点に。

“**BMS**”とは“**Bicycle Manufacturing Service**”の略で、もとより、“**EMS**”を擬した造語。まだ、**technical term**としては定着していないが、ここで提唱する。で、テーマの意味は、「日本の自転車造り、**BMSシステム**を採るとしても、即、**EMS**と似たように、うまくいくか」ということ。

(次号に続く)

(本記事の無断転用については、固くお断りいたします。)